

曲目解説

● ショパン 幻想即興曲 嬰八短調 作品 66

ショパンの 4 曲の即興曲のうち最初に作曲された。ショパンはこの曲を世に出すことを望んでいなかったが、彼の死後 1855 年に、友人のユリアン・フォンタナの手によって『幻想即興曲』と題して出版された。ショパンのもっともよく知られる曲の一つである。ドラマの挿入曲として、またフィギュアスケートの荒川静香選手や浅田真央選手がフリースケーティングに使った曲として記憶されている方も多いことでしょう。

● ショパン ピアノソナタ第 3 番 口短調 作品 58

1844 年にジョルジュ・サンドの住居で作曲され、翌年出版された。この作品が作曲された年にショパンの父ニコラが死去し、その訃報にふれたショパンは悲しみのあまり 2 週間ほど重病人となったが、その約 3 ヶ月後に完成させている。古典的構成美を特徴とし、曲想、規模ともに堂々たる大作である。

第 1 楽章 アレグロ・マエストロ 口短調

4 分の 4 拍子、ソナタ形式。決然とした第 1 主題、ショパらしい優雅で甘美な第 2 主題からなる。ショパンの個性と創意が存分に生かされている。

第 2 楽章 スケルツォ:モルトヴィヴァーチェ 変ホ長調

深刻な内容の多いショパンのスケルツォには珍しく、即興的でこっけい味を含む。モルトヴィヴァーチェという表記はショパンの見解では高速演奏であるが、どの程度の高速であるかまでは言及していない。当時不治の病である肺結核を患っていた作曲者が、生命を意味する *vivace* という語に何かを込めていたのだろうか。中間部では口長調に転じ、瞑想的な楽曲となる。

第 3 楽章 ラルゴ 口長調

4 分の 4 拍子、三部形式。夜想曲風の甘美な楽章である。第 1 主題の旋律は、ピアノで演じるには贅沢なほど流暢優美で室内楽編成に適している。中間部では嬰ト短調ー変イ長調とピアノ協奏曲第 1 番 2 楽章に相似た展開をする。再現部では左手部に鋭いリズムをつけ、単調さを避けている。

第 4 楽章 フィナーレ:プレスト・マ・ノン・タント 口短調 終結は口長調

8 分の 6 拍子、ロンド形式。大曲の締めくくりにふさわしい、情熱的で力強い楽章。主題は序奏和音の後すぐに提示され、ロンド形式の通り繰り返される。終結は口長調である。

< 休 憩 >

● リスト 忘れられたワルツ 第 1 番 嬰ハ長調

アレグロ、4 分の 3 拍子。自筆譜に 1881 年 7 月 23 日作曲と記されている。リストは 7 月 2 日にヴァイマルの家の階段から落ちて大怪我を負っており、その療養の過程で本作が書かれた。刺激的な序奏に続いて分散和音を中心にした優美な主題が流れ出す。和音的には七の和音が効果的に用いられている。最後は冒頭主題の断片が単音で現れ、属音で終わる。

● リスト 愛の夢 第 3 番 変イ長調

「愛の夢」第 3 番の原曲は、詩人であるフライリヒラートの歌詞による「おお、愛せるだけ愛してください」という曲で 1845 年ごろに作曲されました。タイトルから想像すると甘い切ない恋のイメージがわくかもしれませんが、もっと大きく壮大に愛について語っています。この頃のリストは 10 年間の演奏

活動を経て、1848 年からワイマールの宮廷楽長の職についています。そのことで作曲活動により専念できるようになります。「愛の夢」を作曲した 1850 年にワーグナーのオペラ「ローエングリン」の世界初演を指揮しています。「愛の夢」3 番はいきなり美しいメロディーで始まり、その美しいメロディーを中心に曲が組み立てられています。また、右手と左手の役割も面白く、両方の手が伴奏も主旋律も担います。

● ラフマニノフ :前奏曲 嬰ハ短調 作品 23-1 『10の前奏曲』より

ラフマニノフは長調と短調のために 24 曲からなるピアノの前奏曲を作曲した。有名な嬰ハ短調の前奏曲は 1892 年に最初に発表され、11 年後には Op.23 の全曲が、そして 1910 年には最後の 13 の前奏曲が発表された。第 1 番ラルゴは陰影のある左手の分散和音にのせて、哀愁を帯びた単音の旋律が、右手でしっとりとうたわれる。

● ラフマニノフ :前奏曲 変ト長調 作品23-10 『10の前奏曲』より

ラルゴ三部形式で、子守唄風の作品。冒頭からきかれる静かな和音の中に、左手の旋律が柔らかくうかびあがる。幸せに満ちた雰囲気をもっており、ラフマニノフ自身もこの曲を愛奏した。

● ラフマニノフ :前奏曲 嬰ハ短調 作品3-2 『幻想的小品集』より

ラフマニノフのピアノ独奏作品ではもっともよく知られた曲の一つで、1892 年に作曲された。この年最高評価を得てモスクワ音楽院を卒業した 19 歳のラフマニノフは、出版社と契約を結び、ピアノ曲の創作にとりかかった。ショパンの〈幻想即興曲〉を思わせる低音の強打に続いて、主部では遠方で幾重にも鳴り響くカリヨン(釣鐘)がpppで模倣される。中間部は一層内面的で、鐘のモチーフを用いながら即興曲風のパッセージが展開される。回帰した鐘は最大sfffで強奏されるが、次第に遠景へと退きpppの中に消える。

● グラナドス :嘆き、またはマハと夜泣きうぐいす 『ゴイエスカス』より

エンリケ・グラナドスは(1867~1916)レリダ生まれ。主にバルセロナを中心に、ピアニスト、作曲家、教育者として活躍した。ゴイエスカスとは、ゴヤ風の絵、という意味で、スペインの画家フランシスコ・ゴヤの絵に影響を受けて作曲されたことがわかります。

● アルベニス :港 『イベリア』より

イサーク・アルベニス最晩年のピアノ曲。1905 年から 1908 年にかけて全 12 曲が作曲された。アルベニスが病身をおして作曲に取り組んだ〈イベリア〉は、本質的には南スペインのアンダルシアの民族音楽を喚起するものである。港は、カディスと記されており、おそらくカディス地方のサンタ・マリア港のことを指すと考えられる。スペイン的なリズムが特徴的で、港の情景が目浮かぶような、非常に描写的な 1 曲である。

● アルベニス :ナバーラ 変イ長調

ナバーラとは、ピレネーの西に広がる地名である。アルベニスは 1908 年から作曲し始めたが、翌年これを完成させることなくこの世を去ることになった。そこで、弟子であり友人でもあったデオダ・セブラックが、これを復元、補筆し 1909年に完成させた。ナバーラ地方のホタの主題に基づく幻想曲。技巧的な弾きにくさはもちろん、複雑な譜面もこの曲を難曲たらしめる要因になっている官能的で。メランコリーな旋律が独創的であり、多くの人々に親しまれる作品となった。